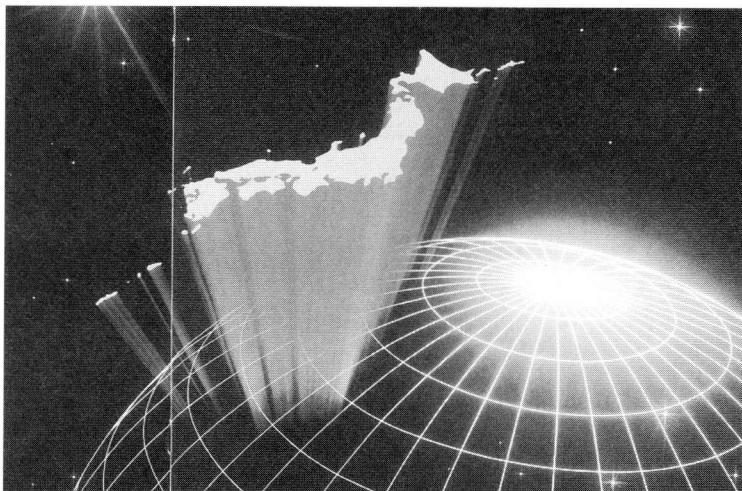


民放唯一の全国放送

短波が伝えた新しいラジオ

～ナイター、株式、競馬中継のあの頃、そして今も～

構成・日経ラジオ社編成報道局 ^{やくしじん} 薬師神 ^{みほこ} 美穂子



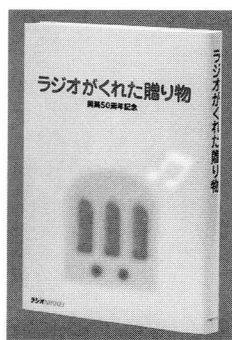
高度な情報を全国へ発信(MSBのサービスエリア図)

写真・資料提供 日経ラジオ社

みん
な
の
こ
ろ
う
民
放
史

題字 中川 順

日経ラジオ社(元日本短波放送)は、平成16年(2004年)開局50周年を迎え、これまで親しまれてきた局名「ラジオたんぱ」を、4月から「ラジオNIKKEI」とした。同時に50周年を期にしてラジオの魅力を再確認して頂きたいという願いを込めて『ラジオがくれた贈り物』と題する本を編纂した。前半は、短波の全国放送という特質を生かした初のナイターレギュラー編成、株式や競馬中継などの歴史を担当者の思い出で綴り、後半は、全国のラジオ愛好者から公募した「ラジオと私」というべきエッセイで綴られている。その中から、短波放送の移り変わりを偲ばせる4人の番組関係者のインタビューを中心に構成した。



開局50周年記念書籍

株式市場と共に

昭和29年8月27日、日本短波放送開局の日のタイムテーブルに

は、午前 8 時 50 分『株式市況』と記されている。以来 50 余年、休むことなく東京証券取引所からの生中継を続けている。

星野明康アナウンサーは昭和 37 年入社。以来、定年まで 38 年間、株式市況を読み続けた。



星野明康氏

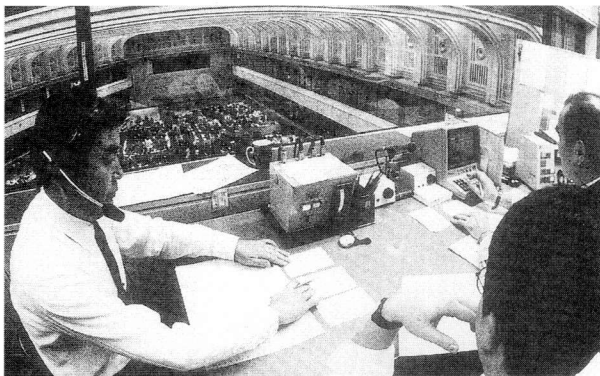
星野氏が入社したころは、株価の表示はまだ機械化もされていなかった。株価は手書きで、放送はもちろん生中継。前日の終値との比較も頭の中で計算していた。

「大体 30 分で交替はするのですが、人間だから間違えることもある。リスナーから電話で指摘されることもありました。一時期、東証のダウ平均株価（現在の日経平均）を『NSB2225 種修正平均』として日本短波放送が公表していたことがあり、私たち市況部員が計算していたので、午後 4 時までの放送時間内に間違いが判つたらすぐ計算し直して訂正していました。コンピュータもなく、電卓も高くて買ってもらえない。225

銘柄、全部そろばんを使ってその場でやるわけです」。

そろばんと暗算で緊張し通しの実況放送も入社 10 年後には株価表示がやつと機械化、当初は東証の株券売買立会場をすぐ下に見下ろす二階にあった放送席も後に三階に変わったが、いきいきとした株売買の臨場感を伝える興奮や面白さはそのまま変わらなかった。

「人の動きで売買の熱気が伝わってきました。あの売買立会場に働く証券マン、場立ち」の風景に



東京証券所2階にあった放送席

はじつに人間味がありました。株価が上がってくるときには拍手が、下がるときには床をどんと踏み鳴らすとゴーツという音が響いてくる。アリのように人々が集まっているところでは、イライラして怒鳴っている人もいます。場立ちの人は体育会系で、背が高くないと見えないし、注文も早いものの勝ちだから人をかきわけけるのも体力勝負、ラグビー部が向いているなんて言われてましたよね」。

冷静であれと思いつつも、その立会場の熱気こそはドラマティックに伝えたくもあった。株価が上がっているときは本人もわくわくし、下がるときは投資家をあまり失望させないように何度も深呼吸し、できるだけ平静に話すように心がけたという。

「特に思い出に残っているのは昭和 62 年 10 月のブラックマンデーのとき。大変でした。床を踏み鳴らす音さえまったくしないし、打つ手がないからシーンとしているだけなのです。悪いニュースばかりだとリスナーが嫌がるから、新聞のスクラップを伝えるコーナーや企業ニュースを何度も繰り返し伝えてしのぎました」。

星野氏が入社したころ1200円だったという平均株価。それがやがて1万円になり、人々の興奮は3万8900円までずっと続いた。証券マンは昼休みも取れないほど忙しく、誰もが4万円台までいくと信じていた。そしてバブル崩壊。一時は7600円まで下がった株価。その変遷を星野氏はずっと見守り、伝え続けた。

その間一貫して「仕事は自分のためじゃない。投資される方がスポンサーだと考えていました。投資家が株を売買されて、証券会社に手数料が入り、その結果、証券会社、証券業協会がスポンサーとして、たんばを応援してくれる。つまりリスナーがスポンサーなのだ」と全力投球してきた。

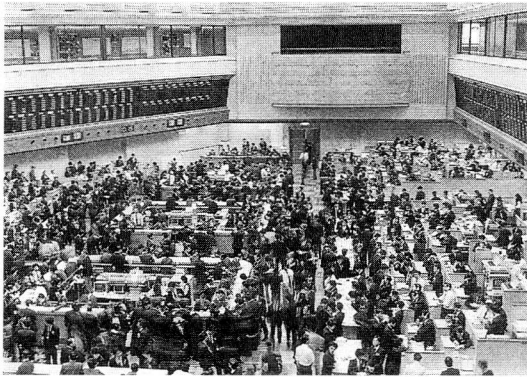
印象に残るのは目の不自由な投資家からの手紙だった。株式市況では、似たような会社名は、通常ニックネームで読み上げる。

例えばニホンセイコウといったら、日本製鋼の場合は『アーム』、日本精工は『コメコウ』などと呼ぶが、「よくわからないので会社名とニックネームを全部読んで欲しい」と頼まれた。早速それに応えると点字の札状が来た。

「今でも自分の宝物としてとっておりまう」。

ラジオの良さは言葉に人柄がでることだと思っている。テレビよりも真剣勝負。見えないものが伝わる怖さと、そしてすばらしさ。たとえば、映像がないから同じ『青』でもどんな青なのか、自分の持つ言葉で表現しなければならぬ。だからこそニュースは『読む』のではなく、『伝える』ものだ。後輩に教えてきた。中身を自分がわかっていなければ、本当には伝えることはできないのだと。

5年前、かつて熱気にあふれた



会場立ちでにぎわう立会場

東証の立会場はすべてコンピュータ管理となり、2000人もの証券マンがひしめいていた場所にはいまや誰もいなくなつた。かつてひしめく証券マンの熱い戦いを伝え続けた星野氏の情熱は今、足で集めた企業情報や市場関係者の動向を伝える若い記者たちを受け継がれている。

ナイター連日中継に

日本中が沸く

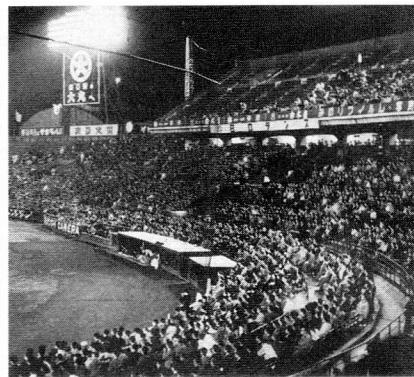
開局から2年。昭和31年、プロ野球ナイター中継を開始した。受信機の問題、聴取者開拓に苦しんでいた当時「社運を賭す」覚悟で開始した記録が社内に残っている。制作費が月間200万円だったというから、経営不振にあえぐ当時に於いてはまさに大英断だった。石川寛氏は当時スポーツ課長として現場の采配をふるった。

「最初のナイター中継はNHKさんだったらしい。でもこちらは連日のナイター中継でナイターファンを定着させましたね」。

ナイターは球場を照明灯で煌々と照らして野球を楽しむ。その豊かさが人々の心を浮き立たせた。

石川氏のモットーは、聴取者に

楽しんでもらうこと。野球放送の中で、可能な限りリアルな音を拾って盛り上げたい。新しい試みとして、球審にワイヤレスマイクをつけてもらうという企画を考え出した。この案はセ・リーグには断られたもののパ・リーグの二出川審判部長が快諾、駒沢球場の東映―大毎戦で実現した。そのゲーム中、偶然、本塁でトラブルが起こり、球審や両チーム監督の声がワイヤレスマイクを通じてラジオから流れ、全国のファンを新たな興奮に誘った。



NSBの Gondola とスタンドの観衆(後楽園球場)

雨にも悩まされた。石川氏にとつて忘れられないのは昭和32年のオールスター戦。NSBスタッフは部長をキャップに名古屋に乗り込んだが、前夜来の雨がやまず順延。なんと順延に次ぐ順延が5日間に及んだ。中継班の経費も底をつき、送金を依頼する羽目に。他の民放各局が続々と引き上げていく中「ナイター」のNSBに断念はありえない」と頑張り通し、ついに放送にこぎ着けたのだった。ナイター放送が軌道に乗り始めた頃、石川氏にとつて嬉しい異変が起こった。台湾在住者からの投書がたくさん届きだしたのだ。



石川 寛氏

「当時台湾には日本語が解る人が多いです。全然考えていなかったことなんです。海外放送じゃないけど海外からお礼の反響がこれだけあるんですから。日本でも台湾でもナイターの時代だったんですね。」
このナイター連日中継が全国で爆発的人気を呼び、短波受信機普

及の契機となった。放送局として、開局当初の試行錯誤を脱し、新たなステージに入ったと言える。そしてこの流れは、昭和31年10月27日の中央競馬実況中継にもつながって行つた。

中央競馬実況中継

昭和31年秋の新聞各紙に「短波放送競馬中継開始」の記事が並んでいる。「ナイター連日中継がヒット」こんどは競馬実況で穴狙う「ギャンブル・ファンへ奉仕？」などの見出しに始まる記事からは、ナイター連日中継の評価の高さと、競馬中継に対する人々の期待と疑問がうかがえる。

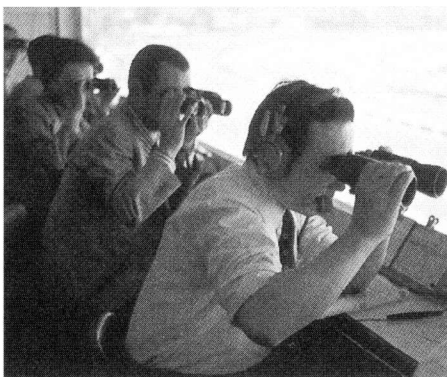
昭和36年入社、長岡一也アナウンサーは、競馬中継草創期を知るひとり。実況放送の第一人者として日本ダービーの実況担当を16年間務め、試行錯誤を重ねて競馬放送の基礎を固めた。



長岡一也氏

「時代とともにファンも変わってきていますね。放送初期のころ

には、競馬や競輪などで一身上の重大事に至るような人もいたりしましたが、昭和60年代になるとずいぶんおだやかになりましたね。そのファンの気持を常に念頭に置き、細かい表現にまで工夫をこらした。



中央競馬場実況放送席

「競馬はゴールインした時に、大体七割の人がやられてチキシヨーと言っているんですね。放送のありかたを考えると、これは無視できません。ある時、解説者にお願ひしたことがあるんです。大穴になってみんながガツカリしたときは、とりあえず驚いてくださいと。驚いて、そのあと、とにかく勝者をたたえてくださいと。」

そうすると、かなり皆さんの気持ちが消化されるんじゃないかと思つたのです」。

競馬ファンの心理状態に大きな変化が訪れた、というよりも、競馬ファンの層自体が大きく変わったと言われるのは「平成の怪物」オグリキャップが活躍した平成2年前後だった。

競馬実況が変わつた日

平成2年当時、ラジオたんば競馬実況中継の顔として、ダービーなど数々の大レースを実況していた白川次郎アナウンサーは、今でもラジオNIKKEI競馬実況のエースである。

平成2年12月、第35回有馬記念はオグリキャップが勝つた。実況担当は白川アナ。ファンにとって、実況放送そのものも忘れ得ないものになった。このレースこそ、新しい競馬の時代の象徴であり、実況放送の転換点でもあった。



白川次郎氏

「皆さんがあの実況をいつまで

も記憶してくださっているとしたり、それは二つの要因が重なったおかげだと思ひます」。

白川アナは、その頃を振り返つて語り、一つ目の要因として当時の時代背景をあげた。

「元々競馬の実況放送というのは、競争の経緯と結果を正確に伝えることが使命であり、且つ全てであると言われてきました。要するに、結果を知るための手段に過ぎなかつたのです。ところが競馬ブームと言われた平成2年頃から、ファンの皆様がその実況にまで目を向けて下さるようになった」。

「もうひとつはオグリキャップという希代の名馬が演出した、奇跡的な名レースに巡り会えたことです。オグリキャップはそれまで競馬を知らなかつた人さえ魅了する資質がありました。地方競馬出身、デビューまで無名でしたが、驚異的な根性と闘志で中央競馬を舞台に華々しく活躍した。その生い立ちやすさまじい人気ぶりから、ハイセイコー以来の人気馬「新怪物」と言われていました」。

平成2年。5月の安田記念で初めてコンビを組んだ武豊騎手を背にレコード勝ちをおさめ、人気を



第35回有馬記念ゴールシーンを
デザインしたテレホンカード

不動のものにしたオグリキャップ。夏の長期休養後に迎えた秋、三度目の挑戦となる天皇賞では生涯初の掲示板にも乗らない6着。不安の芽が少しずつ見え始めて迎えたジャパンカップではオグリキャップらしい姿を見せぬまま、とうとう11着に惨敗していた。

「もう限界か、という言葉が飛び交い、名馬の実績を汚してほしくない、有馬記念は辞退してほしいと願う声が圧倒的になってきた。オグリキャップはそういう中でこのレースに臨んだのです」。

それでも有馬記念当日、オグリキャップは堂々の四番人気。背水の陣を敷いて引退レースに臨む名

馬を、ファンは最後まで見放さなかったのだ。その日の中山競馬場は、夢を、奇跡をと願うファンに埋め尽くされていた。

全国のファンの祈りを背にオグリは走った。

400の標識を通過。第四コーナークラブ。オサイチジョージ、そしてオグリキャップ。オグリキャップが先頭に並んできた。中を突いてメジロアルダン。ホワイトストーンは内、ホワイトストーンは内。先頭4頭、アルダンがちよつと下がるか。メジロライアンが外から来た。ライアンが来た。200を切ってオグリキャップ、オグリキャップ、さあ頑張るぞオグリキャップ！オサイチジョージ、ホワイトストーン、そしてメジロライアン！

オグリだ！オグリだ！オグリキャップ！

オグリキャップ優勝ゴールイン！オグリキャップです！

ファンの夢をここで実現したオグリキャップ。最後の最後を飾りました。堂々の優勝であります。オグリキャップです。

武豊、手を挙げました。

何という馬でしょう。不調が伝えられながらこの最後の最後の土壇場で、見事にあの根性を発揮しました。オグリキャップ見事です。

この歓声をお聞きください。オグリコールです。どうぞ皆さんも一緒にどうぞ!!

白川アナの絶叫もかき消さんばかりの歓声は、やがて一斉に『オグリ』コールに変わった。

「目の前の競馬場を埋め尽くすファンはもちろん、ウインズでも、牧場でも、そしてラジオの前でも、一緒にこの奇蹟を讀えてほしいという思いがこみあげました。『オグリコールです。どうぞ、皆さんも一緒にどうぞ！』。思わずそう叫んでいました。レース自体が感動的であるならば、それを忠実に実況するだけで良い実況になるのです」。

そしてこの日、競馬場で観戦できずラジオを聴いていたリスナーは、どこにいてもラジオを通じて味わうことのできる一体感を知ったのではないだろうか。

時代と共振するファン心理に寄り添い、時には先んじながら、中央競馬実況中継ももうすぐ放送50周年の節目を迎える。